

# Report on the Villages in North China (10) : The Hebei Province and Shandong Province Villages in September 2014

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/41437">http://hdl.handle.net/2297/41437</a>

# 華北農村訪問調査報告(10)

—— 2014年9月、河北省・山東省の農村 ——

弁 納 才 一

はじめに

2007年12月以来、7年もの長期にわたって実施されてきた山西省の農村における聞き取り調査は、山西大学中国社会史研究中心との組織的取り組みとしては、諸搬の事情により2014年8月の訪問調査をもってひとまず終了することになった<sup>1)</sup>。

今後は、これまでの山西省の農村における聞き取り調査の経験を踏まえて、河北大学歴史系の協力と支援を得て主に河北省の農村において聞き取り調査を行うことになった。すでに、2013年度から筆者が研究代表者を務める科学研究費補助金・基盤研究(B)(海外学術調査)が採択されており<sup>2)</sup>、2013年9月に主に北京市の中国農業大学図書館で文献資料調査を行った際に、かつて河北省の大興県と昌平県に位置していた北京市近郊農村を参観している。

よって、本稿では、今回の華北農村訪問調査より1年前の2013年9月に訪問した北京市の大興区前高米店と昌平区水屯についても記録を残しておくことにした。それらの地域は、かつては北京市の近郊農村(かつては、河北省大興県・昌平県に属していた)だったところで、日中戦争中にそれぞれ農村実態調査報告書が刊行されている<sup>3)</sup>。

今回は、2014年9月4日～14日、河北省保定市順平県王各莊<sup>4)</sup>・清苑県張登村<sup>5)</sup>と山東省淄博市高青県花溝鎮閻家村において聞き取り調査を行い、また、北京市の中国農業大学図書館と中国社会科学院経済研究所において文献

資料調査を行った。本稿では、聞き取り調査の内容と参観地について記録することにした。

今回の華北農村訪問に参加したのは、年齢順に弁納才一・祁建民・田中比呂志・古泉達矢・閻美芳(早稲田大学人間総合研究センター招聘研究員)・菅野智博・盧璐(金沢大学大学院人間社会環境研究科博士後期課程1年生)・肖赫(日本での通称名は安地雅博、金沢大学人間社会学域経済学類3年生)の8人である。

なお、本稿においても、主に煩雑さを避けるために、原則として敬称を略すとともに算用数字と常用漢字を用いることにした。また、これまでと同様に、聞き取り調査を行った河北省の農村については、主にプライバシー保護の観点から、原則として団体名・組織名・機関名・地名・人名などの固有名詞を伏せることにした。

## I 北京市訪問地

### (1) 北京市大興区前高米店

現在の北京市大興区前高米店は、かつては河北省大興県内の前高米店村という農村だったが、2013年9月現在、農地は完全になくなっており、高層マンションやビルが林立している。しかも、地下鉄が通っており、最寄駅は地下鉄4号線に接続する大興線の高米店南駅である(写真1を参照)。地下鉄の駅や大通りにも人影はまばらだが、農村の面影は完全に消滅している。地下鉄の駅の周辺には複数の不動産屋も店舗を構えて営業を行っており、前高米店村は完全に北京市のベッドタウン化している。なお、今回は、筆者と古泉達矢の2人が訪問した。

とりあえず、手持ちの地図を手掛かりにして、高米店小学校を探して歩いて行くと、そこには同小学校の校舎はなく、高米店公園となっていた(写真2・写真3を参照)。完成したばかりのように見える同公園には、我々2人以外には誰も訪れる人がいなかった。しかも、同公園内のいくつかの建物のほとんどの部屋は施錠されており、全く利用されていないようだった。まさしく無駄な公共事業(箱物作り)の典型的な事例であると言わなければならない。

写真1. 地下鉄高米店南站出入口



写真2. 高米店公園前の標識



写真3. 高米店公園



## (2) 北京市昌平区水屯

現在の北京市昌平区水屯は、かつては河北省昌平県内の水屯村という農村だったが、北京市街地からの地下鉄は開通しておらず(開通計画もない)、公共交通手段はバスのみであり、宿泊していたホテル(北京友誼賓館)の近くの四通橋(人民大学の近く)から途中の乗り換えも含めて約1時間を要した。水

屯は上述の前高米店村よりも北京市街地からやや遠く離れたところにある。なお、今回は筆者・古泉達矢・佐藤淳平の3人が訪問した。

2013年9月現在、水屯村にはわずかながら農地が残ってはいるものの(写真4の中央部分に見えるのが豆類であろうか)、雑草の多さ(事実上の耕作放棄地が広がっている)から見ると、農業に勤しんでいるとは到底考えられない。

写真4. 水屯村にわずかに残る畑



写真5. 宏順堂門診



本村には、薬局も兼ねている診療所が2か所ほどあり、写真5はその1つの宏順堂門診である。ただし、本村内をひととおり散策してみたが、いわゆる病院らしき建物を見つけることはできなかった。そして、水屯村の中心部であろうと思われる通りには、多くの商店とともに、集合住宅もあった。

以上のような状況から、2013年9月現在、水屯村も、わずかに畑が残っているものの、農村としてはほぼ消滅しつつあると言える。

## II 河北省保定市

### (1) 保定市内

9月5日(金)、北京から保定へは高速鉄道を利用して移動する予定だったが、北京西駅で高速鉄道の切符を購入することができなかったために(9月8日(月)が中秋節で祭日となっており、週末に北京から故郷へ帰る人が大勢いたためである)、急遽、マイクロバスで移動することになったが、渋滞に巻き込まれるな

どして保定に到着したのが19時過ぎになってしまった。そこで、ホテルにチェックインせずに、そのまま河北大学学術交流中心に行き、その中にあるレストランで河北大学の副校長(楊学新)・歴史学院党委書記(李維意)・歴史学院院长(姜錫東)・歴史学院副院长(肖紅松)などと会食をしながら顔合わせを行った。

写真6. 河北大学の旧正門



9月6日(土)午前、王各莊を訪問して祁建民らが同村幹部と打合せを行い、翌日、聞き取り調査を行う約束を取り付け、河北大学に戻り(写真6・写真7を参照)、河北大学学術交流中心のレストランで昼食をとった後、午後は、河北大学歴史学院で農村訪問の日程調整や打ち合わせを行うとともに、共同研究のための協定書を交わした。なお、同日の河北大学側の接待による夕食に豚の頭(顔の部分)が出されてきたのには、ややショックを受けた。

折しも、河北大学構内では、入学したばかりの1年生が軍事教練のために集団で行進していたのをしばしば見かけた(写真8を参照)。そして、保定滞在中、夕食は、やはり河北大学学術交流中心のレストランでとることになった。後に聞いた話では、最近、保定市内のレストランで日本人が殴られる事件が発生したため、大学外で食事をさせないように配慮したのだという。

写真7. 河北大学の新正門(左側から李維意・筆者・祁建民・肖紅松)



写真8. 河北大学構内において軍事教練を行う新入生たち



9月8日(月)午後、新学期が始まったばかりで多忙中だったにもかかわらず、河北大学の鄭清坡に保定市内を案内していただいた。まず、清河道署(写真9・写真10を参照)を外から眺め、ついで、直隸總督署(写真11を参照。清朝雍正年間(1729年)に建てられ、曾国藩・李鴻章・袁世凱などがここで執務したという)を参観した。

写真9. 清河道署



写真10. 清河道署の碑



写真11. 直隸總督署正門



なお、河北大学側から参観することを薦められた古蓮花池(全国10大名園の1つで、1227年に作られた)については、時間の制約によって参観することができなかったので、次回(来年)、保定を訪問した際に、案内していただくことになった。

(2) 順平県高于鋪鎮王各庄村

① 9月6日(土) 午前

9月6日(土)8:15、ホテルを出発し、途中、渋滞にも巻き込まれ、9:30頃、王各庄村(旧完県に属す)に到着した。王各庄村民委員会において祁建民ら(同村幹部と交渉し(翌7日に話を聞くことができる老人を数人紹介してもらうことになった)、同村の概況について聞いている間に、筆者と古泉達矢・菅野智博の3人は同村内を散策した。筆者は、これまで見てきた中国の農村と比べて村内の道路が広いという印象を持った。しかも、同村内の道路は舗装されており、「六一路」や「双福路」などの道路標識があった(写真12・写真13を参照)。

写真12. 村民委員会前の道路(中央に「六一路」の道路標識が見える)



写真13. 村内の道路(左側に「双福路」の道路標識が見える)

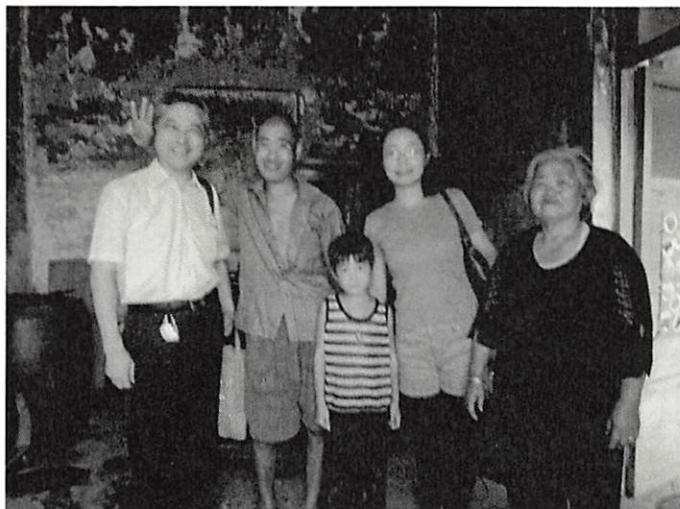


また、老夫婦が犬を連れて羊を放牧していたのに出くわしたが、古泉達矢と菅野智博は、この夫婦に話しかけており、どこから来たのかと聞かれたので、日本から来たと答えたという。

一方、我々3人が村内を散策している間に、村民委員会の前の路上で閻美芳と盧琿が通りすがりの村民に聞いたところによれば、同村は約1,000戸(約4,000人)で、2000年頃に5階建ての「新居」・「新樓」を建設し、現在、村の幹部は昼はその「新居」にいるという。

そして、我々が村民委員会の前に戻ってきた時には、閻美芳と盧琿は本村の老人女性と話をしていたので、その家を訪問させてもらって話を聞いた。その家の敷地内では鶏とアヒルが飼育されていた。また、井戸もあり、現在も利用している(後述の聞き取りを参照)。

写真14. (左側から)筆者・ZSJ・ZSY(ZSJの子供)・盧珺・HZY



聞き取り対象者：HZY(写真14を参照)

聞き取り日時：2014年9月6日(土) 9:50～10:20

聞き取り場所：王各庄村民委員会前の路上及びHZY宅

聞き手：閻美芳・盧珺・肖赫・弁納才一

記録者：閻美芳

#### 王各庄新民居(「新居」・「新楼」)

- ・王各庄「新居」のマンションの購入価格は1㎡当たり約1,800円で、最低2万元を個人で負担し、不足分は村民委員会が10万元まで利子付きで貸してくれる。ちなみに、この家ではお金がないので、「新居」へ転居する予定はないという。
- ・「新居」に引っ越すと、もともとの宅地は村民委員会に返上することになっている。その際、宅地の買い上げ(買い取り)があるようだが、詳しいことはわからない。
- ・本村内では、新たに家屋を建築することはできない。すなわち、村民委員会が「新居」への転居を勧めているようである。

- ・「新居」には、暖房設備があるので、自分で石炭を買う必要がない。そのため、「新居」のマンションを買った人も、夏に本村にいて、冬になると「新居」に戻る人が多い。

## 家族

- ・HZYは、現在、70歳で、小学校5年生まで学んだ。
- ・現在、HZYと息子(ZSJ, 39歳)夫婦及び2人孫(小学校5年生の男の子と小学校1年生で8歳のZSY)の5人で暮らしている。
- ・現在、3畝(1人当たり1畝)の土地を請け負っている(2000年頃に30年間の請負契約が行われた)。よって、HZYと息子夫婦の3人が土地を分配されているが、2人の孫には土地が分配されていないということであろうか。
- ・家の敷地内に井戸があり(家屋の目の前にあったのを確認した)、簡易ポンプで汲み上げて飲用水としている。また、灌漑にも全て井戸水を利用している。

## 村の概況

- ・本村では、周・王・劉の姓が多い。ちなみに、村民委員会の向かい側は周姓が多い。
- ・村民委員会の前の十字路あたりにはかつて市場(趕集か?)があった。また、村内の道路標識は「昔からあった」というが、見た目からすると、最近作られたように思われる。
- ・人民公社時代には、12の生産隊があった。本村は、当時は王各庄村人民公社の「事務室の駐在地」(弁公室?)があり、現在は王各郷の「事務室の駐在地」になっている。
- ・村民委員会の向かい側にある小学校には、現在、児童はいない。新校舎が「新楼」に建設されたので、児童はみんな新校舎に通っている。昔の小学校の警備には老夫婦が住込みであたっている。そして、その小学校の隣には薬局があった。
- ・農村医療保険制度があり、国が約8割を負担(年間1,000元以上の負担)し

てくれている。また、老後の年金は、60歳から毎月55元を支給されている。

- ・旧暦の5と10がつく日は、本村に市が立ち(「趕集」)、近隣の村々からも大勢の人がやってきて賑わう。そして、旧暦の10月5日には廟会(廟会の中心は「新居」の方に移ったが、今でも廟会の時には本村にも人が集まってくる)もあるが、廟(趙王廟?)は私が本村に嫁いでくる前になくなったようだ。
- ・樊孝東によれば、平原にある廟は民国期の迷信打破運動で一部が破壊され、残った廟も文革の時にほとんどが破壊されたという。なお、自分の実家がある張家口あたりの山村(村の人口は、幼い頃は約400人だったが、現在は過疎化が進行して約100人に減少し、しかも、ほとんどが60歳代や70歳代の老人ばかりになっている)には、両側の壁に龍(劉?)王像が描かれた劉王廟があり、文革の時に2つの劉王像が黒く塗りつぶされて破壊されたが、1980年代以降、村民がお金を出し合って劉王廟を修繕した。また、本村の近くにある馬村は、自分の妻の出身地で、妻の母方の祖母は日本軍がきたのをよく覚えているという。

最後に、聞き取りの記録者である閻美芳は、とても貧しい家だったという印象を記録している。

10:30頃には同村を離れ、11:50頃に河北大学国際学術中心に到着してレストランで昼食をとった。

## ②9月7日(日) 午前

「王各庄新民居」内で話を聞くことになったが、村の幹部が我々に紹介してくれたのは2人の老人だけだったので、2つのグループに分かれて聞くことになった。

筆者らの聞き取り対象者は、かつての中国農村では珍しい女性の知識分子であり、解放後の「政治学習」の経験から、大躍進期の政策についても批判的な意見を述べないように自制していた。

写真15. (左側から)王晶・盧琚・LA・樊孝東・肖赫



聞き取り対象者：LA(写真15を参照)

聞き取り日時：2014年9月7日(日) 9:30～11:10

聞き取り場所：「王各庄新民居」内にある七星茗苑接待中心の事務所

聞き手：介納才一・盧琚・肖赫・樊孝東・

王晶(河北大学博士後期課程2年生)

通訳：肖赫・盧琚

## 個人史

- ・ 幼年生まれで、今年で85才になった。本村はL姓が最も多い。解放前、本村には地主はいなかった。
- ・ 戦時中、日本軍が本村にやって来て略奪したことや本村内に「砲楼」を作ったことを憶えている。
- ・ 1943年、本村でも大干ばつが発生し、食糧が不足し、伝染病も流行したので、雨乞いを行った。1944年(13～14歳)、前年の大干ばつの影響を受けて、伝染病(肺炎)で医者をしていた父親が死去し、その直後(3か月?)、祖母・妹・弟(6歳くらい)も同じく伝染病で死去した。また、母親が亡

くってから約20年が経過した。

- ・解放直後(17歳頃)、小学校に入学し、当時は本村で字を読める人がいなかったのので、本村の記録係の手伝いをし、成績優秀により、飛び級して4年で小学校を卒業した。そして、1957年に保定一中を卒業した。
- ・27歳の時(1957年?)、6歳年下の王進義(本村の出身で、学校で一緒に学んでいた。2年前に死去)と結婚した。
- ・1957年から約20年間、夫婦ともに学校の先生をやった。最初は王各荘(小学)で4年生を教え、その後、高于鋪鎮(「民中」=民辦の中学校教師?)で国語を教えた。月給は20数元だった。
- ・1956年に高級合作社ができ、1958年から土法製鉄運動が行われ、公共食堂もできたが、1959~62年、食糧不足が深刻だった。

#### 家族史

- ・祖父母(祖母はWL氏)・父母(母もL姓)は全て本村の出身である。また、弟1人・妹1人との3人きょうだいである。さらに、現在、4人の息子と5人の孫がいる。長男はプラスチック工場を経営している。
- ・解放前は13畝の土地を所有する「下層貧農」だった。
- ・文革直前(四清運動期?)に家譜を没収された。
- ・1957年、結婚して夫とともに教師になると、耕作する者がいないという理由で、耕地は村に没収された。
- ・1960~70年代、夫は本村の会計も兼ねていたが、二重帳簿(上級政府への提出用と実態を反映したもの)を作成していた。
- ・1980~81年頃、土地の再分配が行われ、1人当たり1畝が分配された。

#### 農業生産及びその他

- ・かつての作付作物は小麦・玉蜀黍・山芋・紅薯(甘薯)で、小麦を売って雑穀を買って食べていた。甘薯は「紅薯面」として食べた。玉蜀黍の1畝当たりの収穫量は、かつては数十斤にすぎなかったが、現在は約1,300斤となっている。
- ・1963年、本村で洪水が発生した。その3~4年前、国の指示によって稲

(大米)を栽培するようになり、全ての収穫物を国に納めていたが、その後、再び、国の指令で別の作物を植えるようになった。

- ・本村では、毎月、1・5・10の付く日に「趕集」があった。
- ・本村の近くの川から水路へ水を引いて貯水池に貯めた。

午前の聞き取りを終えた後、順平県城内のレストラン(かつて県政府幹部の宴会用だったが、習近平による宴会禁止の通達を受けて、庶民向けとなった)で昼食をとり、食後、同県城附近を參觀した。

### ③9月7日(日) 午後

聞き取り対象者は、当初、「王各庄新民居」の敷地内で他の老人たちと麻雀をしていた。やや無理を押しして話を聞かせてもらうことになったが、聞き取りを行っている途中で麻雀をやりに戻りたいなどと言い出した。

聞き取り対象者：ZSJ(写真16を参照)

聞き取り日時：2014年9月7日(日) 15:10~16:10

聞き取り場所：「王各庄新民居」内のマイクロバスの中

聞き手：弁納才一・劉潔・菅野智博・盧瑋・肖赫

通訳：肖赫

### 個人史

- ・亥年(1923年)生れで、92歳になった。小学校に通ったことはない。本村の出身で、実家は30畝を所有する「上中農」だった。
- ・17歳の時、結婚した。夫(LBC)は3歳年下で、本村の出身だった。夫とともに本村でずっと農業に従事していた。

### 家族史

- ・夫は、小さい時、両親を亡くしていて、所有地11畝のうち、兄弟に3畝の土地を分ける予定だったが、実際には1.5畝を分けたので、9.5畝の土地を所有していた。土地改革時に、階層は「中農」とされ、互助組に参加した。
- ・兄(ZSR)は、かつて八路軍の団長をしていたが、除隊した後、県城の師

写真16. ZSJ(右側から3番目)



範学校の教師になった。

- ・現在、3人の息子・2人の娘・4人の孫・1人の孫娘・1人の曾孫がいる。このうち、長男(68歳)はすでに公社を退職し、次男(57歳)は民政局に勤務し、三男(50歳)は自動車「配件」工場を経営しており、長女(65歳)と次女(62歳)は保定に住んでいる。

### 3年困難時期

- ・1958年頃、大食堂で食事をした。1960年代の食糧困難時期に本村でも餓死者が出た。餓死者は老人が多かった。両親は、1960年に腸炎に罹り、事実上、餓死した。
- ・本村では、一般の穀物が不足していたので、「黍(shu)」を食べて飢えを凌いでいた。
- ・本村には、天津方面から多くの乞食がやって来て、本村の白菜などを盗んで食べていた。

### 抗日戦争期

- ・日本兵が本村にやって来るといふ知らせを受けると、本村の女性はみな米蔵に隠れた。1938～39年、本村では3人の村民(張老lao, 張蘭柱, 王文子)が日本兵に殺され、また、保長の劉老同が八路軍に協力していたといふことで、日本兵によって家に火をつけられて焼かれた。さらに、日本兵は、中国人に協力させて「砲楼」を本村内に作った。
- ・夜になると、八路軍が本村にやって来て地雷を埋めていた。日本兵が村に来る時にはまず大砲を打ってから来るので、すぐに八路軍に教えてあげた。実は、本村一帯では、日本兵よりも日本軍に協力する中国兵(偽軍)の方が多かった。彼ら(偽軍)は本村に来て略奪していた。

### 紡織

- ・かつて、本村の女性の大部分は畑仕事をしながら、自作棉花を利用して紡織にも従事していた。ただし、綿糸は柔らかすぎるので、織布の前には「漿線」(小麦粉を水に溶かした糊状のものを付けて綿糸を固くする加工)の作業が必要だった。
- ・本村には織布ができる女性は少なかったため、織った粗布を販売することもあった。よって、土布の生産は、自家消費用の土布、本村民から綿糸と手間賃を受け取って織る土布、村外へ販売する土布の3種類があった。

### (3) 清苑県張登鎮張登村

9月8日(月)、清苑県張登鎮張登村を訪問し、同村民委員会において10:20頃から約1時間ほど同村の書記から同村の概況などについて話を聞いた後、三義廟など、同村内を案内してもらった(写真17を参照)。当日は、ちょうど市も開かれていた。

また、同村の書記に案内してもらって、本村の郊外にあったスイカの集荷市場(「冀中瓜果蔬菜批發市場」)も参観し(写真18を参照)、スイカをごちそうになった。それらのスイカは内モンゴル・吉林省・寧夏回族自治区など全国各地からトラックで大量に運び込まれていた。

写真17. 三義廟



写真18. 冀中瓜果蔬菜批發市場



そして、昼食として「農家菜」「農家菜」の鍋(鍋の1つには兎の頭とともにその肉が入っていた)をごちそうになった。

### Ⅲ 山東省淄博市

#### (1) 淄博市内

9月10日(水)、早朝到北京を出発し、高速鉄道に乗車して山東省淄博を訪問した。午後、古い街並みが残る周村古商城で喬家大院(周村分号)・楊家大院・大染坊・油坊などを参観した(写真19～写真22を参照)。

全体的な印象として、河北省保定市農村と比較して山東省淄博市農村はやや豊かな感じがした。

周村には、「周村焼餅」の他に、周村がかつて山東省内の物流の一大拠点として繁栄し、また、山東省農村では土布の生産や養蚕あるいは柞蚕(山繭)の飼育が盛んだったことから、「粗布单床」(シーツ)、「蚕蛹」(食用)、シルクなどが名産品として土産物屋で売られていた。

写真19. 周村古商城



写真20. 周村古商城大街正門



写真21. 英米煙草公司



写真22. 周村古商城大街



## (2) 高青県花溝鎮閻家村

10:00頃、本村に到着して、まず本村内を散策した。本村の中央を貫く道路は舗装されており、本村内では農村特有の畜糞の臭いもほとんど感じることもなく、全体として清潔感があった。本村内の「高青県花溝鎮双百工程示范基地範」となっている乳牛飼育場(写真23を参照)、月餅等の菓子を製造する工場(写真24を参照)、アヒル飼育農家(写真25を参照)などを参観した。ただし、時間の関係から、本村内で唯一残っているという養蚕農家を訪問することはできなかった。このように、本村でも農業外の産業も勃興しており、一定程度の脱農化が進行しており、また、これらの飼育場や工場では村外の労働者が雇用されている。

写真23. 高青県犏騰乳牛養殖專業合作社



写真24. 高青県立青食品廠



なお、小学校(龍桑小学)への通学にはスクールバス(校車)が出ており、昼休みには昼食をとるために隣村(周村)・本村に児童がスクールバスに乗って一度戻ってくる(写真26を参照)。

聞き取り日時：2014年9月11日(休) 11:30～12:10

聞き取り場所：高青県花溝鎮閻家村村民委員会

聞き取り対象者：王立葉(村長, 写真27を参照)

聞き手：弁納才一・田中比呂志・古泉達矢・菅野智博・盧珺・肖赫  
通訳：閻美芳

写真25. アヒルの飼育場



写真26. 「龍桑小学校車(龍桑小学一周間)」



写真27. 集合写真(中央右側に座っているのが本村の村長)



#### 村の概況

- ・本村の村民委員会は、村長(王立葉, 59歳, 2011年より)と2人の村民委

員の計3人によって構成されている。現在、本村に書記はいないが、今月末に村長が書記を兼ねる予定になっている。

- ・本村の総戸数は142戸で、520人おり、5つの姓(閻, 張, 王, 靳, 郝)のうち、閻姓が約90%である。近年、村の人口は年々減少している。県城のマンションで暮らすようになった家もある。
- ・抗日戦争中、日本軍が本村を通過したこともあったが、日本をそれほど見かけることはなく、一方、八路軍は本村から約25km離れた高城に集まっていたという。
- ・解放前、本村にも廟があったが、解放前後になくなった。また、本村にはプロテスタントの教会があるが、かつて村外から嫁いできた女性が個人的に家庭内で信仰していたものにすぎず、現在、本村の信者としては数人の老婆がいるだけで、信者の多くは近隣の村からやってきている。
- ・土地改革前、本村には2戸の「地主」がおり、それぞれ400大畝(1,000畝)と200大畝(500畝)の耕地を有する大土地所有者だったが、どちらも小作地として土地を貸し出すことはなく、実際には、前者は2人の長工と数人の短工を雇用し、また、後者は数人の短工を雇用する自作農(富農)だった。一方、土地無所有戸も多く、その多くは主に短工として働いていたが、生活は苦しく、穀物1斗を借りて収穫後に1.5斗を返すという暮らしをしていた。
- ・かつては、自作の桑を用いて養蚕を行う農家が20~30戸いたが、現在、養蚕農家は1戸である。また、かつては自家消費用として土布を織っていた。
- ・1990年代以降、出稼ぎ(主に建築業)に出る者が増え、高収入を得られようになったため、家を建て直す家も出てきた。一方、棉作は減少している。
- ・最近、村道を舗装するために、全村民から1人当たり100元を徴収し、また、県政府からも5万円の支援があった。

## おわりに

今回は、河北省保定市の2つの農村を訪問し、そのうちの1つの農村では複数の老人から話を聞くことができた。初回としては、かなり順調だったと思われる。また、山東省淄博市の農村にも訪問し、簡単ながら、村の幹部から話を聞くことができた。なお、あくまでも感覚的・印象的に言えば、山西省の農村よりも河北省の農村がより豊かであり、さらに、山東省の農村がより一層豊かであるように思われた。

ただし、いずれの村も、今回が最初の訪問地であり、また、河北大学としても初めての経験だったこともあり、今回は全て予備的な調査にとどまった。しかも、日中関係が緊張している中であって、日本人が中国農村に足を踏み入れること自体がかなりの困難を伴わざるをえない状況にあった。

来年度の農村聞き取り調査においては、日中関係の緊張緩和が進展することを切に願うとともに、我々の日中共同研究が日中関係の好転と相互理解に幾分でも裨益するように努めたい。

なお、2015年1月31日(土)、河北大学から鄭清坡・魏国棟・樊孝東の3名を日本に招聘し、東洋文庫において、研究会を開催した<sup>71</sup>。

## 注

1) 筆者・祁建民・田中比呂志・河野正・前野清太郎などがそれぞれ中心となって、山西省農村におけるこれまでの調査内容をまとめたものとして、以下のものがある。

- ① 抽稿「華北農村訪問調査報告(1)－2007年12月、山西省太原市・霍州市農村－」(「金沢大学経済論集」第29巻第1号、2008年12月)・同「華北農村訪問調査報告(2)－2008年12月、山西省太原市・霍州市・平遙県農村－」(北陸史学会「北陸史学」第57号、2010年7月)・同「華北農村訪問調査報告(3)－2009年12月、山西省P県の農村－」(金沢大学環日本海域環境研究センター「日本海域研究」第42号、2011年2月)・同「華北農村訪問調査報告(4)－2010年8月、山西省P県の農村－」(「金沢大学経済論集」第31巻第2号、2011年3月)・同「華北農村訪問調査報告(5)－2010年12月、山西省の農村－」(「金沢大学経済論集」第32巻第1号、2011年12月)・同「華北農村訪問調査報告(6)－2011年8月、山西省の農村－」(「金沢大学経済論集」第32巻第2号、2012年3月)・同「華北農村訪問調査報告(7)－2012年8月、山西省の農村－」(「金沢

大学経済論集」第33巻第1号, 2012年12月)・同「華北農村訪問調査報告(8)－2013年8月, 山西省の農村－」(「金沢大学経済論集」第34巻第1号, 2013年12月)・同「華北農村訪問調査報告(9)－2014年8月, 山西省の農村－」(「金沢大学経済論集」第35巻第1号, 2015年1月)。

②三谷孝・内山雅生・祁建民「中国内陸農村訪問調査報告(1)」(長崎県立大学国際情報学部「研究紀要」第11号, 2010年12月)・同「中国内陸農村訪問調査報告(2)」(長崎県立大学国際情報学部「研究紀要」第12号, 2011年12月), 内山雅生・祁建民「中国内陸農村訪問調査報告(3)」(長崎県立大学国際情報学部「研究紀要」第13号, 2012年12月)・同「中国内陸農村訪問調査報告(4)」(長崎県立大学国際情報学部「研究紀要」第14号, 2013年12月)・同「中国内陸農村訪問調査報告(5)」(長崎県立大学国際情報学部「研究紀要」第15号, 2014年12月)。

③田中比呂志「華北農村訪問調査報告(1)－2009年12月, 山西省P県D村－」(「東京学芸大学紀要(人文社会学系Ⅱ)」第62集, 2011年1月), 河野正・田中比呂志「華北農村訪問調査報告(2)－2010年8月・12月, 山西省P県D村－」(「東京学芸大学紀要(人文社会学系Ⅱ)」第63集, 2012年1月), 田中比呂志「華北農村訪問調査報告(3)－2011年8月, 山西省P県D村－」(「東京学芸大学紀要(人文社会学系Ⅱ)」第64集, 2013年1月), 富士由紀・田中比呂志「華北農村訪問調査報告(4)－2012年8月, 山西省P県D村－」(「東京学芸大学紀要(人文社会学系Ⅱ)」第64集, 2013年1月), 田中比呂志「華北農村訪問調査報告(5)－2013年8月, 山西省P県D村－」(「東京学芸大学紀要(人文社会学系Ⅱ)」第65集, 2014年1月), 河野正・前野清太郎・古泉達矢・内山雅生・田中比呂志「華北農村訪問調査報告(6)－2013年8月・2014年8月, 山西省L県G村・D県Y村－」(「東京学芸大学紀要(人文社会学系Ⅱ)」第66集, 2015年1月)がある。

④河野正「華北農村調査の記録－2013年8月, 山西省P県D村の聞き取り記録－」(「東洋文化研究」第16号, 2014年3月)。河野正・前野清太郎・佐藤淳平「華北農村調査の記録－2014年8月, 山西省L県G村の聞き取り記録－」(「学習院大学国際研究教育機構研究年報」創刊号, 2014年12月)。

また, 山西大学中国社会史研究センター側の調査内容をまとめたものとしては, 行龍・郝平・常利兵・馬維強・李嘎(弁納才一訳)「山西省農村調査報告(1)－2009年12月, P県の農村－」(金沢大学環日本海城環境研究センター「日本海城研究」第42号, 2011年2月), 郝平・常利兵・馬維強・李嘎など(河野正・佐藤淳平訳, 田中比呂志監修)「山西省農村調査報告(2)－2010年8月, P県の農村－」(「東京学芸大学紀要(人文社会学系Ⅱ)」第63集, 2012年1月), 郝平・常利兵・馬維強・李嘎など(河野正・佐藤淳平訳, 田中比呂志監修)「山西省農村調査報告(3)－2011年8月, P県の農村－」(「東京学芸大学紀要(人文社会学系Ⅱ)」第64集, 2013年1月)を参照されたい。

2) 科学研究費補助金・基盤研究(B)(海外学術調査)2013年度－2017年度「華北農村訪問調査による近現代中国農村社会経済史像の再構築」(研究代表者: 弁納才一)。

- 3) 当該村に関する農村実態調査報告書として、「河北省大興県前高米店村調査報告」(華北交通株式会社, 1945年5月)と「河北省昌平県水屯村調査報告」資料第22号(華北食糧平衡倉庫, 1945年6月)がある。なお、この文献資料を用いて北京市近郊農村の経済発展については、拙稿「近現代北京市近郊農村における経済発展と都市化」(大阪経済大学日本経済史研究所「経済史研究」第18号, 2015年1月)を参照されたい。
- 4) 当該村に関する農村実態調査報告書として、「農産物商品化ニ関スル調査 河北省完県王各莊村」農産物商品化調査第三次中間報告(華北綜合調査研究所経済局第一部, 1944年6月)がある。
- 5) 当該村に言及したものとして、神野尚起「北支農業事情の一端—河北省清苑県張登鎮に於て」(日本米穀協会事務所「食糧経済」第6巻第3号, 1940年3月)がある。
- 6) 今回の河北省農村訪問調査については、本稿の他に、祁建民「中国内陸農村訪問調査報告(6)」(長崎県立大学国際情報学部「研究紀要」第16号, 2015年12月刊行予定)もある。
- 7) 各自の発表のタイトルは、鄭清坡「20世紀以来的冀中定県農村調査」、魏国棟「華北民間宗教調査—以保定地区為例」、樊孝東「集体化時期的華北農村」である。